

Introduction

- Youth Studies が取り組んでいる背後仮説
 - 現代社会における “Transition to Adulthood” の様態
 - Arnett (2004) “Emerging Adulthood”
 - ❖ 「大人」を「自己充足性 self-sufficiency」という主観的な指標によって再定義
- 日本における経験的研究
 - 自己充足性は「大人」の必要条件か？
 - ❖ Yes (石田他 2013)
 - 一方で、ライフコース上の役割移行（就職、結婚、親なり）がアングロ・サクソン圏と比較するといまだに必要条件として有効 (石田他 2013; 久木元 2009)
- これまでの研究の問題
 - たしかに、社会的あるいは自己の「大人」到達認知に関して、それぞれの因子の重視度には十分に答えてきた
 - が！単純な重視度の分析だけでは、実社会における人びとの複雑な条件イメージ（多元結合因果）には十分に答えられない (石田 2007; 五十嵐 2015)

Research Question

- 「大人」の条件とは何か？
 - RC1: 「就職」, 「結婚」, 「離家」, 「感情」の4条件からなるプロフィールの大人カテゴリー様態の記述的分析
 - RC2: 大人カテゴリー様態の必要条件・十分条件は何か
 - RC3: 社会人口学的属性と条件軸の関連

Method

- 調査のデザイン
 - ブール代数分析を前提にしたヴィネット形式のアンケート調査 (集団自記式)
- データ
 - 都内私立大学A, Bに所属する大学生
 - 2016年4月実査
 - 回収数: 475 (有効回答数: 467)
- モデル (石田 2007)
 - 個人 k の多次元特性を, n 次元ベクトル $x_k = (x_{k1}, x_{k2}, \dots, x_{kn}), x_k \in X$ によって表現する。ただし, X は可能な n 次元ベクトルの集合である。このとき, X の部分集合である社会的カテゴリー A についての個人 i の社会的カテゴリー関数 f_i^A を $f_i^A: X \rightarrow \{0,1\}$ と定義する。具体的には,

$$f_i^A(x_k) = \begin{cases} 1(x_k \in A) \\ 0(x_k \notin A) \end{cases}$$
 - 関数の定義域を n 次元2値変数ベクトル集合に限定すると,個人 k の特性ベクトルは,

$$b_k = (b_{k1}, \dots, b_{kn}) \quad \forall b_{ki} \in \{0,1\}$$

である。ここで, 1はその次元の特性をもっていること, 0はもっていないことを表す。また, $b_k \in \{0,1\}^n$ なので, 社会的カテゴリー関数は $f_i^A: \{0,1\}^n \rightarrow \{0,1\}$ と定義される。

Acknowledgment

本報告は、林川友貴氏、稲葉昭英氏、茂木良平氏、麦山亮太氏、打越文弥氏の助言により大幅に改善されました。記して感謝申し上げます。

Result

表1 プロフィールごとの「大人」回答割合と確信度

就職	結婚	離家	感情	「大人」			「大人ではない」			(n)
				回答割合	確信度平均	SD	回答割合	確信度平均	SD	
J	M	L	E	98.07	3.81	0.50	1.93	2.78	1.09	(467)
J	M	I	E	95.91	3.64	0.58	4.09	2.79	0.79	(464)
J	m	L	E	94.21	3.64	0.57	5.79	2.89	0.89	(466)
J	m	I	E	92.93	3.46	0.66	7.07	2.48	0.80	(467)
j	M	L	E	78.16	3.17	0.74	21.84	2.76	0.81	(467)
J	M	L	e	70.24	2.99	0.74	29.76	2.87	0.77	(467)
j	M	I	E	63.17	2.90	0.74	36.83	2.76	0.75	(467)
J	M	I	e	59.87	2.78	0.75	40.13	2.87	0.78	(466)
J	m	L	e	59.31	2.91	0.77	40.69	2.74	0.75	(467)
j	m	L	E	58.37	2.87	0.80	41.63	2.70	0.77	(466)
J	m	I	e	41.33	2.86	0.75	58.67	2.74	0.71	(467)
j	m	I	E	35.33	2.76	0.73	64.67	2.76	0.73	(467)
j	M	L	e	31.12	2.73	0.79	68.88	2.89	0.76	(466)
j	M	I	e	22.10	2.73	0.81	77.90	2.96	0.75	(466)
j	m	L	e	13.49	2.81	0.82	86.51	3.11	0.78	(467)
j	m	I	e	5.78	2.67	0.92	94.22	3.48	0.74	(467)

表2 「大人」カテゴリー様態のブール代数式

ブール代数式	(n)	%
E	(31)	6.6
J	(13)	2.8
E (J + M)	(12)	2.6
J + M	(12)	2.6
E (J + M + L)	(11)	2.4
E*J	(10)	2.1
E + J + M + L	(9)	1.9
E + J(M + L)	(8)	1.7
J + L*E	(8)	1.7
J + M*E	(8)	1.7
E (J + L)	(7)	1.5
E (J + M + L) + J (M + L)	(7)	1.5
E (J + m*L)	(7)	1.5
J + M*L*E	(7)	1.5
J (E + L) + M*L*E	(6)	1.3
J (E + M + L)	(6)	1.3
J (E + M + L) + E*M	(6)	1.3
E + J	(5)	1.1
E + J + M	(5)	1.1
J (E + M) + M*L*E	(5)	1.1
J + E (M + L)	(5)	1.1
⋮	⋮	⋮
合計	467	100.0

表3 出現頻度順必要条件

条件	(n)	%
none	(337)	72.2
E	(86)	18.4
J	(31)	6.6
J, E	(10)	2.1
M	(2)	0.4
J, L, E	(1)	0.2
合計	(467)	100.0

表4 出現頻度順十分条件

条件	(n)	%
none	(252)	54.0
J	(82)	17.6
E	(69)	14.8
J, M	(17)	3.6
M	(14)	3.0
E, J, M,	(9)	1.9
E, J	(8)	1.7
E, J, M	(5)	1.1
J, M, L	(4)	0.9
E, J, L	(2)	0.4
E, M	(2)	0.4
J, L	(2)	0.4
E, L	(1)	0.2
合計	(467)	100.0

Discussion

- RC1: 全体の回答傾向において、「大人」回答割合が90%以上だったのは、J + E の組み合わせ
- RC2: もっとも頻度が高かった必要条件は E, 十分条件は J. ただし, 必要条件ないパターンが全体の70%をも占める。このことは、回答者の大多数が多元的な「大人」カテゴリーを有していることを示している。
- RC3: 女性のほうが男性に比べて「就職」を重視する「大人」カテゴリー認識を有している傾向。

表5 性別とJカテゴリー軸のクロス集計表

	J軸		その他		合計
	%	(n)	%	(n)	
男性	30.96	(74)	69.04	(165)	(239)
女性	38.39	(86)	61.61	(138)	(224)
合計	34.56	(160)	65.44	(303)	(463)

Note: $\chi^2(1) = 2.823, p < 0.100$

- 以上のような知見は、単純な必要条件の質問のしかたでは、抽出することは出来ず、ブール代数によって人びとの半潜在的な認知枠組みの抽出に部分的に成功したと考えられる。